

---

# MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 1 2 >

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON - 3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 1 2 >

### 【Nコード】

N2074M

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

和人と再会した秀。それは自分の中のもう一人の『自分』を目覚めさせる事になるのでは、という不安がお互いに広がる。

和人と秀の出会いを描いたMOONシリーズ第三段『WOLF MEET VAMPIRE』第12話です。いよいよクライマックス。お勧めの音楽は『DERSIN』：『キ・ミ・ダ・ケ・ニ』vv

『WOLF MEET VAMPIRE』＜12＞（前書き）

やっと後半部分に突入。お付き合いください（―¥）。。。。

『WOLF MEET VAMPIRE』<12>

<12>

澄んだ春風が一陣、室内に流れ込んだ。

和人の髪をしなやかに揺らす――

「――とりあえず、”あれ”が吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>だって事は認めよう。”

見ちまった”もんは、しょうがないからな。」

12 畳ほどある和人の洋室で、ベッドの端に腰かけた秀が言った。  
「しかし、それとお前の関係は？ 貴史はあんたを尋ねて行って、あいつらに殺されたんじゃないか？」

『和人を尋ねて来た、あいつが悪いのさ！』

あの時の彼女の台詞。

『和人は我らの宿敵――九桜様を倒した憎んでも余りある奴！』

そして、何故か心の中で違和感を感じない『帝王』という名称――

『あんな『人間』に侵された奴、我ら闇の一族の帝王に相応しくないわ！』

「あいつら――お前の事、帝王にふさわしくないだの、何だの  
と言っていたが……」

「……」

「吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>と知り合いなんて、お前、一体何者なんだ？ もしかして、  
貴史を殺した連中の仲間なんじゃないのか？」

「仲間なんかじゃない！」

秀の言葉を強い口調で否定する、和人。

一瞬、その眼差しが翳りを帯びる。

見る者全ての心を引き込む、哀しみを宿した瞳……それを押し隠すかの様に長めの前髪を右手でかき上げ、俯く。

「……俺は、誰も巻き込むつもりはなかった……」

信じてくれ、秀。

「……」

秀は、それ以上和人を詰問する事が出来なかった。

デスクの脇の椅子に身を任せる和人の姿が、妙に儚く、秀の目に映る……

Gパンに青色のシャツ。

街を歩けば、何処にでもいる普通の若者と同じ姿なのに……

・

何故か時折、彼はそのまま『消えて』しまいそうに感じる。

しなやかな黒髪と、男性の秀が見ても一瞬息を飲んでしまう程、

整った顔立ち……

じつと見つめると、彼の瞳の色は碧色に輝く。

そのせいなのだろうか……

否……『消える』という生易しいものではない。

彼はいつでも『永遠』の一手手前の時間を紡ぎ、かろうじて『存在』しているのではないだろうか。

秀にはそう思えてならない。

あの夜……桜並木の下で、和人を逃してしまった時のように、

秀は次の『瞬間』に移ることを恐れた。

だから……何も言えず、ただ彼の姿を見つめていた。

「どうした、秀。」

無言の秀に気付き、和人は声をかけた。

「……いや。」

秀は『現実』に戻るため、一度、頭を振った。

それから、

「お前さ・・・もしかして俺といるの嫌？自分の事、根掘り葉掘り突っ込まれるから・・・他人に干渉されたくない？」

「・・・」

肯定とも否定ともとれる表情で、和人は微笑した。

「お前を巻き込みたくないだけだよ。このままずっと、今まで通り『普通』の生活を送っていて欲しいだけさ。」

「自分の中のもう一人の『自分』？」

秀は苦笑した。「何て事ないさ、長い『付き合い』だもん・・・今更、どうこうなるもんでないし・・・たまには役に立つ。」

「

「それで十分だ・・・昨日の夜の事はもう、忘れる。」

「ただ・・・」

秀は、心の奥底にいつでも潜んでいた不安を、和人に打ち明けた。

「もし、”あれ”が『人』を襲ったらどうする？昨日の血に飢えた吸血鬼のように・・・『あれ』はあいつらと『同類』らしい。」

「俺”には”あれ”をセーブする事が出来ない。」

「大丈夫だよ、秀。今までもそうやって生きて来たんだろう？」

安らぎを与える和人の深く澄んだ色の眼差し・・・「それとも、もう一度『記憶』を消してやろうか？」

「いや・・・やめとくよ。」

秀は、ベッドから立ち上がって言った。「お前の事、忘れたいな  
いからな。」

「・・・」

笑顔を残し、和人の前を静かに通り過ぎる秀。

ばたん・・・

目の前で閉じられた、茶色い扉を和人は無言で見つめていた。

「お邪魔様！」

扉一枚向こうから、秀の明るい声が聞こえてくる。

「あら、もう帰っちゃうの？」

引き留める朝子の声。「せっかくだから、お夕飯食べてけばいいのに……」

「いんや、悪いね。仕事があつからさ、また今度ね、朝子ちゃんじゃ。」

最後の言葉は、鉄の扉を閉める音と重なって和人の耳に届いた。

「……」

ふいに、和人は席を立ち素足でベランダへと飛び出した。

間もなく8階下の路上にマンションを後にした、秀の姿が現れる。

「！秀……」

と、呟く様に彼の名を呼ぶ。

しかし――振り返る事もなく、秀は一人歩いていく。

「届く訳ないじゃない、こんなところから。」

黒い手すりを握りしめる両の手に力を込めた時、背後から朝子の声がした。

「朝子……」

「何よ、その顔。まるで、母犬に捨てられた子犬の様よ。」

朝子は微笑し、ベランダに立ち尽くす彼と並んで立った。

心地よい午後のそよ風が、彼女の長い茶色の髪を大きく揺らしている――

両肘を手すりに付き、朝子は和人を振り返り見た。

「逃がしたくなかったら、素直にそう言えばいいのに――違う？ 和人。」

「……」

和人は既に姿を消した秀の軌跡を追うかの様に、眼下の路上を見つめた。

「彼…… もう、来ないつもりよ、あなたの所に。」

「――その方が、あいつにとっていいだろ？」

彼は呟いた――視線はそのままに。「俺と関わったら、否応な

しにあいつの『闇』の血は目覚めさせられる。そうしたら、もうあいつは今まで通りの生活を送れなくなるかもしれない。『昼の住人』としての――」

「『送れなくなるかも』でしょ？」

朝子は答えた。「そんなこと、和人が決めることじゃないわ。秀が決める事よ。」

「そうだけど・・・」

「そうだけど？何？」

朝子は小首を傾げる様にして、和人の顔を覗き込んだ。「言い訳でしょ、そんなの。あなたが自分自身の心を誤魔化すための。」

「――」

「ほら、凶星！本当、素直じゃないなあ、和人は――」

白く細い指先を彼の髪に絡ませて、ゆっくりと自分の額に彼の額を引き寄せる。

5cm程上に位置する、和人の瞳をじっと見つめ、「本当は、気になって仕方がないでしょ、秀の事・・・そうよね、たった一度会っただけのあなたを新宿中探し歩いて見つけ出してくれたんですもの――」

「朝子・・・」

「そんな人、今までいた？長いこと『永遠』と隣り合わせの生活をしてきて、一人で寂しくなかった？」

静かに朝子は問いかける。「『人』の一生は短いものよ。私だって・・・あなたより先に逝ってしまう『存在』なんだから・・・彼もそうかもしれない。でも、それだったら尚更、あなたの『永遠の一瞬』を大切にしなくちゃ・・・果て世の後まで、孤独だった思い出だけを背負って生きていくつもり？」

「――」

和人は左手を上げ、彼女の体を引き寄せた。

胸元に、朝子の心地良い髪の香りを抱きながら、

「――朝子の言う通りかもしれない。初めてあいつに会った時



「あの夜、桜の樹の下で……あいつは、俺と同じ目をしていた。別れた後も、妙に気になって仕方なかった。」

「うん。」

「『FESTA』のマスターから俺を探している奴がいると聞いた時も、またいつもの興味本位の人間だと思っていた、会う気などなかった……なのに……」

和人は静かに目を伏せ、「……俺は秀の友人と会った、彼が奴らに殺される直前に。あいつは名前さえ知らない俺の事をずっと探してたって……俺は気になっていたのに……探そうとはしなかった。」

「……知られるのが、怖かったから？吸血鬼一族の長  
ヴァンパイア  
……闇の世界を統べる『帝王』としての本当の姿を。」

和人は頷いた。

「たぶんね。」

「それもね、和人。」

朝子は、和人の顔を見上げ、「秀が決める事。あなたじゃないわ……新宿中走りまわってあなたを見つけ出した程の人だもの。きつと『帝王』としてのあなただつて受け止めてくれるわ。」

朝子は和人から離れ、白い雲がかかる新宿のビル群を眺めた。

「そんな気がする……ね、和人。そろそろ一族を守るためだけじゃなくて、自分のために生きてみたら？」

「……」

「この青空の下を、歩いてみたいと思わない？彼のように、『昼の住人』としてこの空の下を、この街の中を……」

朝子の言葉が春風に乗って、和人の耳に届く。

『安らぎ』という『昼の住人』<sup>ひと</sup>のみが持つ気持ちを、彼の心に伝えるために……

『WOLF MEET VAMPIRE』＜12＞（後書き）

……ってか次の話のプロット考えなきゃ。。。 （自爆）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2074m/>

---

MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 1 2 >

2011年1月26日09時08分発行